［特別講演］

# 水戸藩の医学と医療

鈴木　暎一
常磐大学コミュニティ振興学部教授／茨城大学名誉教授

## はじめに

水戸藩といえば，まず想起されるのは，2代藩主徳川光圀（1628～1700）の開始した『大日本史』の編纂，その事業に伴って興ったいわゆる「水戸学」であり，そしてまた9代藩主徳川斉昭（1800～60）によって開設された藩校弘道館とその教育などであろう．

しかし，水戸藩では，光圀以来，人間の生命にとってもっとも重要な医学・医療についての関心もすこぶる高く，その関心は以後ながく継承され，斉昭時代をへて幕末に至っているのであって，この伝統は水戸藩の一つの大きな特色をなしている．

## 1. 光圀の時代　―前期―

藩主時代の光圀は，江戸の藩邸に薬室を設け，ここで丹薬・散薬・丸薬・薬酒・薬油を毎日作らせ，また中国・朝鮮・オランダなどから取り寄せた薬までここに貯え置き，諸士をはじめ，藩内の僧侶，水戸家出入りの者の求めにも応じ，水戸でも評定所にこれらの薬を常備して，願い出の者には身分を問わず分け与えた（『桃源遺事』）．また，延宝6年（1678）には筑間玄述を長崎へ派遣してオランダ医学を修めさせたり，宮井道先・西村玄春ら名鍼医を侍医とするなど，医学の充実にも取り組んでいた（『水戸市史』中巻（一））．光圀42歳のとき，すなわち寛文9年（1669）の「規式帳」（『茨城県史料』近世政治編Ⅰ所収）には，「御医師」として畠山牛庵（知行高300石）以下37名，「御外科」として村越養庵ら8名，「医師惣領」として8名，の記載が見える．「御医師」は内科医で，当時は外科医よりも全体的には尊重され，待遇も良かった．

光圀時代の医学として注目されるのは，侍医の鈴木宗与が光圀の命を受け，『救民妙薬』を編纂したことである．この書は元禄6年（1693）に上梓された．内容は，酒毒・蛇毒・鼠咬・痔・霜焼・虫歯など130項目，397種の処方を収める．今日から見て効用に疑問を抱くものもあるが，「補薬」として枸杞酒を挙げているのは興味深い．

この書は，『大日本史』の編纂局である彰考館の発行で版を重ねたが，100年余をへた文化3年（1806）には同じ版元で，貝原益軒の手録にかかる簡便な処方を加え，『増補救民妙薬集』として版を更新しているところを見れば，藩内のみならず，全国にも需要が多かったことが知られる．当時他藩でこのような処方を出版のうえ配布した例はなかろう．

## 2. 原南陽の業績　―中期―

江戸時代前期までは，いわゆる「後世方」が隆盛であったが，中期になると「親試実験」の実証主義を重んずるいわゆる「古医方」が擡頭し，京都の山脇東洋の『蔵志』や下総古河藩医河口信任の『解屍篇』などの成果が現れた．一方，蘭学の勃興によって西洋医学も輸入され，安永3年（1774），『解体新書』の出版となった．

水戸藩の医学と医療活動は，この安永（1772～80）から文化期（1804～17）にかけて，藩医原南陽による実証的学風の導入を機に格段の進展を見せる．

原家が藩に出仕したのは曾祖父からであるが，藩医としての勤務は父昌術に始まる．南陽は22歳の時，上京して山脇東洋の子東門に学ぶとともに，産科賀川玄迪の指導を受け，実証医学の神髄を会得し

て帰郷した．

天明7年（1787），侍医となった南陽は，文政元年（1818）に致仕，同3年68歳で没するまで四十数年の長きにわたり治保・治紀・斉脩3代の藩主に仕えるかたわら，多くの著作を残し，また藩内外に多数の門人を育成した．その門人帳によれば，その数常陸の藩内124名，藩外41名，奥州9名，下野82名，下総7名，その他17名，不明10名，合計220名である（『水戸市史』中巻（二）．

> 側医ニテ治験最多シ，著述ノ書多梓ニ授ケ世ニハル，弟子多シ，伊勢及四国ノ伊予ナドヨリモ来リ学ハル，水戸ニテノ大医ナリ……今水戸ノ医ニ其弟子ナラヌハナシ，治方多ク其伝ヲ受ケテ世ニ行ナハル，然レドモ皆師ニ及バズ

とは，水戸藩の学者で南陽の墓碑銘を記した小宮山楓軒の言である（『楓軒紀談』）．

著作には，軍陣医としては最初の出版といわれる『戦陣奇方砦草』（1巻），鼠咬についての全身症状を論じた『瘈狗傷考』（1冊），鍼灸について詳記した『経穴彙解』（8巻），遺稿として出版された『傷寒論夜話』（5巻）などのほか，師の口述を門人らが筆記校正した『叢桂亭医事小言』（7巻）もあり，この書には水戸近在の患者治療の実例が多く記録されている（『水戸市史』中巻（二））．

### 3. 斉昭の時代　―後期から幕末へ―

斉昭は，天保6年（1835），「医弊説」（原漢文．石島績編著『水戸烈公の医政と厚生運動』上巻所収）を記して，「医薬ナルモノハ，保命ノ大具，死生存亡ノ依ル所」にもかかわらず，現今の医者の，自己の名利と保身ばかりを求める傾向を痛烈に批判し，医界の改革を主張した．のみならず自身で数多の処方を収集し，55巻もの『景山奇方集』を編み，この書では中国・朝鮮のそれも加え，ときに自評を加えている．

斉昭のこうした医学・医療への積極的関心は，天保12年に創立されていた藩校弘道館の構内に同14年，医学館を開設するに至る．水戸藩内の各所には，地方郷医の研修機関としてすでに文化年間から稽医館と延方学校があり，斉昭の藩主就任（文政12年，1829）後，さらに敬業館などの3郷校が藩校開館以前に存在し，また水戸城下では，本一丁目の会所が医者のための集会所となっていた．藩校内の医学館はこれら各所の医療機関のセンターとして，また総合的医学教育の場として建てられたのである．

医学館の講堂には，その設立主旨を説いた斉昭自撰の「賛天堂記」が掲げられていた．「賛天」とは『中庸』の「能く物の性を尽せば則ち以て天下の化育を賛くべし」から採った語で，斉昭はこの中で，外国に頼らずわが国内で良薬を製する技術開発の急務を力説し，医学館をその確たる拠点にしようとした．全国の藩校中，医学館あるいはこれに準ずる施設をもっていたのは40余校，全体の16%程度といわれるが（笠井助治著『近世藩校の総合的研究』），水戸藩のようにその開設にあたって独自の理念を掲げたところは他に例がないであろう．

医学館には，製薬局・調薬局・本草局を付属させ，薬草園のほか，牛乳・牛酪を作るための牛を飼育する養牛場まで調えた．「賛天堂記」の主旨を実現するためである．

医学館の医療活動として特筆すべきものは，種痘の計画的実施である．水戸藩では弘化3年（1846）から痘瘡が大流行し多数の死者を出す事態となり，医学館では翌4年（1847）から毎月1日と15日を種痘日と決め，希望者に実施することとした．担当は弘道館教授を兼ねていた本間益軒・松延道円で，指定日に出向けない者には益軒とその養子玄調の自宅（益軒は寺町，玄調は泉町）でも受けることができるように取り計らった．城下から遠方の者には郷医が種を医学館から受け取って各地でこれを実施した．水戸藩の種痘実施は医学館開設の前年の天保13年（1842）からで，当時は人痘であったが，嘉永3年（1850）からは水戸でも牛痘が始まった．これを最初に行ったのは本間玄調（棗軒）である．玄調は種痘の名手として知られ，自身あるいは門人の行った総数は13,400人にのぼるという．

玄調は，代々医者の家に生まれ，その祖父・養父はともに郷校稽医館の創立・発展に尽力した人物である．水戸で原南陽の門に入ったのち，江戸へ出，のち紀州の華岡青洲に学んで大きな感化を受け，さらに長崎に赴いてシーボルトにも師事した．玄調には，『瘍科秘録』（5巻），『続瘍科秘録』（5巻），『内科秘録』（14巻），『種痘活人十全弁』（1巻）など十数種の著述があるが，これらの中で，青洲が秘伝としていた全身麻酔薬「通仙散（別名：麻沸散）」を青洲没後はじめて公開したこと，脱疽治療のためはじめて下肢切断の成功例を記していることなどは日本医学史上に記憶されるべき業績である．

医学館では，神仙丸・紫雪をはじめ諸薬を作り，貧民には無料で分かち与えた．安政6年（1859）には「水府医学館」の名で「瘧痧病（コレラ）の手当並治方」と題する刷り物を用意し藩内に配布している．その実効性には疑問符の付く処方もあるが，予防医学の見地から評価されてよい事例であろう．

なお，水戸地方の民間による製薬としては，茨城郡河和田村（水戸市内）高倉家の万病薬と称する司命丸と，城下鉄砲町筑波屋の目薬北斗香とが全国的に知られ諸国に普及した（『水戸市史』中巻（三））．

## むすび

述べるべき事項は他に多くあるものの，水戸藩の医学・医療の実態を全国的視野から見れば，江戸・京都・大坂の大都市や長崎などの水準には及ばないであろう．しかし，この地方にも，「保命の大具」の発展に生涯を賭けた人々は少なからず存在し，それぞれ地元に大きな貢献をなしたのである．二人の代表的藩主光圀と斉昭がともに医学・医療の分野においてもその時代のリーダーであった事実を改めて確認することも重要であろう．

〈付記〉本稿を草するに当たり，茨城大学名誉教授瀬谷義彦先生のご教示を得た．記して深謝の意を表する．